

論文名：介助磨きの姿勢は歯みがき運動と歯垢除去効果に影響する（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 村井 朋代

---

小児や障害児・者および要介護者の口腔衛生には介助者による介助磨きがきわめて重要である。しかし、それぞれの発達や障害の種類・程度・体格や年齢および環境により、介助磨き時の姿勢は様々である。今回、日常的に介助磨きの実践および指導をおこなう女性歯科衛生士20名による介助磨き時の歯ブラシの運動および、荷重、さらには介助磨き後の歯垢残存量を計測することにより、介助磨き時の姿勢が歯みがき運動および歯垢除去効果にどのように影響するか検討を行った。

永久歯列模型を装着したマネキンを仰臥位と対面位の2種類とし、一口腔を上下顎前歯部臼歯部頬舌側の12ブロックに分割した上で、各ブロック10秒間の介助磨きの運動を計測した。また、人工歯にはあらかじめ人工歯垢を塗布し、介助磨き後の歯垢残存面積を画像分析・計測を行った。その結果、対面位は仰臥位に比較してリズムの遅い歯みがき運動であること、さらに対面位では上顎中切歯口蓋面の歯垢が残存しやすいことが明らかとなった。すなわち、介助磨きに熟練した歯科衛生士でも、その姿勢が歯みがき運動および歯垢除去効果に大きく影響することが示された。介助磨き時の姿勢は、環境や磨かれる側の全身状態および口腔内状況により様々な制限を受けるため、統一は困難である。各姿勢の特徴を理解した上で、歯みがきの方法や歯ブラシの形態等をも考慮し、より効率的な介助磨きを検討していくことが重要と思われた。